

歌集

極楽のうた

松田良夫



歌集

極楽のうた

松田良夫

短歌新聞社

歌集 極楽のうた

平成7年11月13日発行

著 者 松 田 良 夫

〒937 魚津市江口袖町41-3

発 行 者 石 黒 清 介

印 刷 所 朋 文 印 刷 所

発 行 所 短 歌 新 聞 社

〒166 東京都杉並区高円寺南4-43-9

電話 03 (3312) 9 1 8 5 番

振替口座 00150-4-21683番

定価 2500 円

極楽のうた

・無量寿如来と不可思議光仏に守護されて静かに
ただひたすらに合掌し念仏する私の毎日を歌う

松田良夫

1 世の中に道はいろいろあるけれどわが
行く道は弥陀のひとすじ

2 あの世界とはいかに住みよき国ならむ行
きて戻りし人の無きとは

3 よろこびも悲しみもまたみな同じ同じ
一人のおなじ味わい

4 その人はそのひとなりに味わいをうれ
し涙と悲し涙に

5 日廻りてあの時泣きし憶いでもいまは
静かに想うひととき

6 会うことも別れることもみなおなじ自

然を如来と悟りしいまは

7 念仏を称えて過ぐす昨日今日ころは

いつも極楽極楽

8 阿弥陀あり釈迦ありそして七高僧さら

に親鸞ありて救えり

9 忘るなよ喜愛と慈悲のそのころされ

ば極楽そして極楽

10 慈悲心をおこせばともに救われる人も

極楽われも極楽

11 極樂は右手左手思うまま心正しく仏ぶつを
念じて

12 合掌し念仏すればおのずから心おさま
りすべて極樂

13 親も子もわかれ別わかれに生活す核分裂の
いまの世あわれ

14 仏壇を清めてひとり僧を待つ独り暮し
も早や二十年

15 両親がこの世を去りて五十年その墓ま守
護もりわれは過しぬ

16

わが家系守護^{まも}り伝えてわれ来たりされ

どこの後^{あと}たより無き哉

17

五念門五功德門と門を建て庭を飾りて
われは楽しむ

18

狭けれどわが庭なればたのしけれ^{ほとけ}仏と
共に在^ありと思えば

19

平和なる心を庭に眺めつつわれは生き
なんその日その日を

20

季節^{とき}来れば花も咲かせて葉も萌えて樹^き
木は自然^きをたのしみつ生く

21 風吹けば風になびきつ雨降れば雨に濡
れつつ草木は育つ

22 独り来て独り去り行くこの世なり無一
随者をわれは習いぬ

23 昔より僧ヶ岳は僧ヶ岳いま現代も眺めてひ
とり楽しむ

24 僧という名称に魅力感じつつその名の
山を仰ぎたのしむ

25 われいまだ幼き頃より仰ぎ来し僧ヶ岳
は現代いまも変容かわらず

26 聳え立つ僧ヶ岳はいまもなおわれを育^{はぐ}

む心楽しく

27 わがいのち光によりてささえられひか

りと共に永久^{とわ}に息づく

28 人としてこの世に在るは短くも生命だ

けは無限^{とわ}に生き継ぐ

29 山は山海は海にてありけるをわれは人

間ひとり老いゆく

30 人として生きる間は短くもわがいのち

だけは永久^{とわ}に生かさん

31 もの書きを始めし頃よりわれはただわ

が文生かすとひとり祈りて

32 世は末世まつせいくら叫べどひとはみなわが

身ひとつにただまっしぐら

33 落ちぶれてはじめてわかる人ごろた

だ憐れなるわが身なる哉

34 世の中は貧富幸災種々なれど人それぞ

れの運命さだめなる哉

35 何事も運命さだめと知らばただひとつ南無阿

弥陀仏を称えこそつれ

36 世の中をただ悲しみの目で見ればみな

悲しみの姿だけなり

37 世の中を楽ししと見ればみなともに楽し

とばかり映る倖利しあわせ

38 善し悪しをただこの目のみで別わかつ哉人

のころの浅し深しも

39 釈迦しや仏はすべてこの世は自然じねんなり法のりに

生きよと教え給えり

40 雪の日は独り住まいの吾れならばりハ

ビリなどして過す朝夕

41 枝の雪重たく耐えてひたすらに春を待

ちいる寒椿かな

42 庭の木々黙して何も語らねどやがて来

る春信じて立てり

43 庭木等は植えられしままに年老れど吾

れは動きつ七十余年を

44 老子あり孔子孟子抱朴子漢詩を読みて

われは学びぬ

45 西行や良寛芭蕉一茶あり先人を読みて

吾れは学べり

46 阿弥陀あり釈迦ありそして七高僧さら

に親鸞われを教えり

47 昨日今日満ち足りてありひとり吾れ明

日は極楽と思う愉しさ

48 世尊われただ一念に尽十方無尋光如来

に歸命して生く

49 天と地とくり返される日と共に昨日も

今日も明日も楽しく

50 来る春を待ちかねている人のあり今日

か明日かと首長くして

51 庭の樹木まだしつとりと雪の下されど

小枝の芽の覗きたる

52 わが庭に空はれて射す陽のひかり春め

きてありうれしからずや

53 昨日今日雪は降れども時折りに射して

くる陽の春めきてあり

54 ひとりわれ昨日も今日もまた明日もた

だ念仏して安く過さむ

55 ひとりわれ昨日も今日もわが詩歌をう

たい記して春日過さむ

56 明日からはまたただひとりわが詩歌を

うたい記して過ごさむと思う

57、ひとりわれ生きて学びてこの世をば過

ぎて自然に帰らむと思う

58 この世をば南無阿弥陀仏と合掌しあの

世に続くわが身なりけり

59 今日も亦念仏しながら朝早く起きて掃

除す家の内外

60 ひとりして暮らす日々なりひたすらに

弥陀を伴侶にわれは樂しむ

61 良寛をしのびてひとり今日も亦われは
歌して時を過せり

62 合掌の指のあいだに声を見る南無阿弥
陀仏とわれは歌詠む

63 有難さ身にしみてくる今日も亦自由な
りけりひとり暮らしは

64 苦しさも悲しさもみな忘れ去り阿弥陀
と共に今日もたのしむ

65 儚なさはこの世にあればみなおなじ阿
弥陀忘れて楽しさはなし